

2016年度 第44回画像電子学会年次大会

熊本地震の現地での メディア利用状況

2016/6/19

株式会社インプレスR&D
代表取締役発行人 井芹昌信

本資料は、熊本地震の体験を記した自著
から抜粋したものです。

インプレスR&D [NextPublishing]



New Thinking and New Ways
E-Book / Print Book

熊本地震 体験記

震度7とは
どういう地震
なのか？



井芹 昌信 著



本書の収益金は熊本地震の被災者のために寄付します。

4月14日地震の報を受け、急遽益城町にある実家へ戻った私は、その晩そこで震度7の本震に襲われた。



● 読者の震災関連原稿大募集!

『熊本地震体験記 — 震度7とはどういう地震なのか?』

<http://nextpublishing.jp/isbn/9784802090827>

小売希望価格: 電子書籍版 500円(税別) / 印刷書籍版 800円(税別)

電子書籍版フォーマット: EPUB3 / Kindle Format8

印刷書籍版仕様: A5判 / モノクロ / 本文100ページ

ISBN: 978-4-8020-9082-7

発行: インプレスR&D

本震発生

4月16日 1時25分

朝

損傷を受けた実家に一人で泊まり、予期しない震度7の「本震」に遭遇してしまった。二度目の大地震で事態は一変した。ここでは、震度7の地震の恐ろしさをお伝えする。

●外は真っ赤

緊急車両がすでに集結、レスキュー隊が活動（16日2:30頃）

それで外に出ました。出てみると、そこは一面真っ赤。赤かったのは、火事ではなく緊急車両のランプです。うちの実家は役場のすぐそばにあるのですが、役場の周りには昨夜の地震（前震）の対応のためすでに数十台の緊急車両が集結していて、それが一斉に稼働し始めていたのです。



少し道を歩いてみると、倒壊し軒先が道路に突き出している家がありました。大変なことになったと思いました。

緊急車両は県内だけでなく、九州各県から駆けつけてきていました。

宮崎ナンバー、福岡ナンバーなどの車を見ると、胸が熱くなりました。



緊急車両の列を見て、自分の出番はない（というより出なくてもいい）
と思い、（内心ほっとして）家に戻りました。そして、今度は靴を履いた
まま寝ました。

●翌朝の惨状

きのうとは別世界、言葉が出ない（16日朝）

翌朝、まわりの状況を見て、目を疑いました。



この写真は居間の状況ですが、テーブルが上下逆さまになってしまっています。実は前震後は横倒しだったのですが、本震でこのありさまです。「机の下に隠れろ」は、震度7では甘いと思いました。

ただ、奥にあるテレビは倒れていません。前述したように、寝室のテレビも台との固定は外れていなかったなので、テレビの固定は震度7でも有効ということです（もしテレビを固定されていない方は、今日にでも固定してください）。



この部屋は、すべてのものが倒れて、それがさらにかき混ぜられたような状況で、入ることができませんでした。つっぱり棒なども役に立たなかったと思われます。



外に出てみると、家の周りには大量の瓦が散乱していました。家から5mくらいまで飛んでおり、中には地面に突き刺さって抜けられないものもありました。地震の最中に不用意に外に出るのは危険だ、ということがわかります。

結局、私は、一度は外の様子を見に出たものの、最後は寝てしまったのですが、朝、部屋を見渡してみても、改めて恐ろしくなりました。大きな窓サッシは外れて部屋に倒れ込んでおり、私の寝ていたベッドをかすめていました。

いま思えば、家から出て避難するのが正しかったと思いますが、そのときは自分は両親を救援に来た身なので、明日からのいろいろなことに備えて寝ておかなければならないと思っていたのです。

最後まで耐えてくれた実家の我が家に感謝しました。

家の周りの様子を見てみると、写真のように言葉を失うありさまでした。



二軒隣の家は倒壊し、高齢のご両親が下敷きになったことを聞きました。お父さんはレスキュー隊に助けられましたがお母さんは亡くなられたと。昨夜のレスキュー隊は、このご両親の救出に向かっていたのだとわかりました。そして、何もできなかったことを申し訳なく思いました。ご冥福をお祈りします。

避難所生活

4月16日朝

~

19日

救援に来たつもりが、何と、自分も避難者になってしまった。ここでは、本震後の避難所生活の様子をお伝えする。

●メディアの使われ方

新聞、テレビが二大情報源 ケータイも大活躍

仕事柄、メディアの利用のされ方が気になったので、いろいろ注意して見ていました。以下は、主にミナテラスで見た、避難所でメディアがどのように使われていたかの状況です。

新聞

避難所には、地元新聞である『熊本日日新聞』と『読売新聞』が号外も含めて毎朝、全員が読めるくらい大量に無料配布されていました。被害状況、避難所情報、インフラ状況などの詳細把握にとっても役立っていました。



テレビ

テレビは玄関前に1台設置されていて、停電期間以外はずっとつけられていました。阿蘇大橋が落ちた映像が出たときなどは、落胆の声が漏れていました。やはり映像はリアリティーがあります。

このテレビと新聞という伝統的メディアが、二大情報源になっていたと思います。



通信インフラ

キャリアの通信回線は、信じられないことに一度も切れることなく利用ができていました。優秀でした。阪神淡路、東北などの経験から、対策がなされていたのだと思いました。それと、今回はダメージの大きいエリアが狭い範囲に集中していることが一因かもしれません。Wi-Fi (00000JAPAN) が無料で使えるという貼り紙がありましたが、実際はその電波は飛んでおらず、別の2つの有料サービスが動いていました。固定回線はありませんでした。私は安定性から自分のスマホのテザリングを使っていましたが、問題なく動きました。

ケータイ/スマホ

高齢者も含めてほとんどの人が持っていて、高齢者はケータイで電話利用、若者はスマホ利用とはっきり分かれていました。

電話は、頻繁に使われていて、家族、親族や友人との情報交換に利用されていたと思います。

スマホの利用者は主に若者ですが、充電エリアに座り込みずっと画面にとらめっこしているやからが結構いました。何をやっているかまでは

わからないのですが、ソーシャルメディア（LINE、Facebookなど）が使われていたのではないかと想像しています。

ソーシャルメディア

職員の人に聞いたところ、施設や職員側ではソーシャルメディアは利用していないとのことでした。しかし避難者や県民は利用しているようで、配給でカレーが出されたことがありましたが、それはツイッターなどで避難者からの情報が拡散し、それを見た近くの町の飲食店がボランティアで届けてくれたとのことでした。温かいカレーはとても喜ばれていました。

パソコン

パソコンはほとんど使われておらず、避難所には100人くらいがいたのですが、私以外では職員も含めて一人だけでした。避難所に持って来てないだけかもしれませんが、日常的に利用されているようには見えませんでした。いまやスマホがその代わりをしているのかもしれませんが。

施設側も、パソコンやネットワークをあまり利用されていないようだったのは意外でした。役場が機能停止していたので、その影響だったかもしれませんが、避難所、役場、県庁などの役所間の情報ネットワークがしっかりできていれば、食材・物資の配給や人探し、道路情報など格段に効率が上がるのではないかと思います。

書籍・雑誌

こういう緊急事態では書籍・雑誌はあまり役に立たないと思っていましたが、18日頃に50冊くらいの本棚が設置され、ちょっとした癒やしになっていました。

●マスメディアの取材状況

報道の大事さを再確認

私が現地に来たときから、すでにかかなりの数のマスコミが入っていました。取材対象は、皆さんがご存知のように被害の激しい現場や避難所に集中していたように思います。

ネットの一部では、今回の熊本地震の報道姿勢にやり過ぎとの批判が上がっていましたが、私はそれに該当するようなシーンは見なかったもので、それについてはわかりません。ただ、前震のときからマスコミが入っていたおかげで、被害の状況が早く的確に全国に伝えられたのだと思うので、やはりマスコミの力は大事だし、必要だと再確認しました。

自宅の近くを見回っているときに、読売新聞の記者に出会いました。その記者は被害の激しい地域を一人、足で回っておられました。聞いてみると、亡くなられた方の家を訪ねて、ご家族にその経緯や人柄をインタビューし、1~2週間後に記事を掲載するとのことでした。地味だけど大事な仕事をされていると思いました。



●私のIT利用

ネットがあって本当によかった

私は、スマホとノートパソコン（正確にはchromebook）、それに電池式スマホ充電器と三又コンセントを持ち込みました。どれも大活躍でした。

スマホは主に電話利用で、家族、親族や会社との連絡に使いました。その他には、余震対応のために「災害アプリ」を入れておきました。「地震速報」は、余震が多いのでちょっとうるさかったけど役に立ちました。私の居たところは震源地のそばだったので、警報即地震（というより地震即警報）でしたが、実家で片付け作業をしているときなど、精神的な備えとして有用でした。それと写真撮影に使いました。本書に掲載した写真のほとんどは、私のスマホで撮ったものです（その他は従兄が撮ったもの）。

ノートパソコンは仕事柄いつも持っているのですが、同級生のメーリングリスト（ML）での情報交換、Facebookへの投稿、ウェブでのインフラ状況チェック、道路通行実績マップ、航空券の取得などに使いました。

今回の被災では、自分の仕事テーマであるインターネットとデジタルデバイスの進化とありがたみを、身を持って経験することができました。しかし同時に、田舎ではまだデジタルネットワーク利用環境が十分に普及しておらず、これらの恩恵を受けられていない現実を知ることになりました。

●こうなっていればいいのに、と思ったこと

自治体間のイントラネットがあるといいのでは

上記のように、被災地では自治体も被害を受け、そのシステムが通常のように機能しません。私のいた益城町の役場も崩壊し、機能を失っていました。こういう場合には、それを援助したり、場合によっては肩代わりできるような自治体間ネットワークシステム（自治体イントラネットのようなもの）があると有効ではないでしょうか。

避難所認定はもっと柔軟に対応すべきでは

本文にも書いていますが、ある条件を満たせば自己申告で避難所と認定してもらえる、また車中泊の人たちで希望があれば避難所へ誘導する仕組みなどがあればいいと思いました。

家が倒壊した方には慰謝料のようなものがあったらいいのでは

倒れた家と倒れていない家では精神的な意味での被災程度は別物だと思います。り災証明の判定基準では、家が倒壊かどうかではなく再建にかかるコストの程度で見ているようですが、倒壊した家の方には何か別の慰謝料のようなものがあったらいいのではないかと思いました。

道路のがれき撤去は最優先で

ゴールデンウィークに再び帰ったとき、通れない道路がまだかなり残っていました。道路は誰もが使うものですし、その回復は全体の復興速度に大きく影響すると思います。幹線だけではなく、あらゆる道は公的に最優先で通れるようにしたほうがいいと思いました。

自宅のがれき処理も業者にしかできないのでは

家の片付けをした際の瓦、塀や壁などがれきは想像を超える量でした。ルールでは、自宅のがれきは自分で処理場に運ぶことになっていましたが、処理場は大混雑で、量的にも時間的にも、とても自分たちで処理するのは無理だったので、庭に放置してきました。がれきや壊れた家具などの処理は業者にお願いできるような、公的なサービスを受けられるといいと思いました。

ブルーシートかけにも公的サービスが必要では

本文でも書いたように、地震後は家の中の物を雨から守るための屋根へのブルーシートかけが必要です。この作業と費用にも公的サービスが受けられるといいと思いました。

諸手続きはオンラインでもできるといいのでは

り災証明などは、その家の世帯員が役所に出向かなければ受け取れません。実際には、大きな被害を受けた世帯ほどそこに居住している可能性は低いので、ネットによるオンライン受付をしてもらえればと思いました。

災害救助に対する国の専門組織が必要では

日本では、災害は、自治体のことは自治体でやるのが原則になっていると思いますが、実際の被災地では、自治体の職員の方々も被災者になっています。自分の家や家族の心配をしつつ仕事されているのは、精神的にも肉体的にもむずかしいのではないかと感じました。それと、大地震はたいていの自治体が初体験ということになるので、それに対応するノウハウが不十分だと思われます。国による専門の災害救助機構が必要なのではないでしょうか。

ご清聴、ありがとうございました。

Web:

NextPublishing <http://nextpublishing.jp/>

OnDeck <http://on-deck.jp/>

インプレスR&D <http://www.impressrd.jp/>

Facebook:

NextPublishing <http://www.facebook.com/NextPublishingReview>

OnDeck <http://www.facebook.com/OnDeck.daily>

井芹昌信 <http://www.facebook.com/masanobu.iseri>